

# 敦煌の古墓群と出土鎮墓文（上）

關尾史郎

## はじめに

死者の鎮魂を目的として陶器の器腹に墨書または朱書され、墓中に埋納された鎮墓文は、後漢時代に長安や洛陽周辺で出現したが、<sup>(1)</sup>やがて3世紀も後半になると敦煌まで普及し、5世紀前半に至るまでこの地でも多くの鎮墓文が作成され、そして埋納された。王朝で言えば、西晋から「五胡十六国」（以下、「五胡」と略記）にかけてのことである。説明するまでもなく、このような本質からして、鎮墓文は当時の人々の冥界観を端的に表現した文章であり、敦煌で出土したそれについても、かかる観点から町田隆吉により検討が行われている【町田1986】<sup>(2)</sup>。またその文章の冒頭には通常、紀年（被葬者の死亡年月日）と被葬者の姓名などが記されており、出土した地域の政治的な動向や社会構造の一端を解明するためにも有用である。<sup>(3)</sup>さらに言えば、中国世界の西北地域からは、敦煌以外でも鎮墓文が出土しており、それらを総合的に比較することにより、出土地ごとの鎮墓文の特徴はもとより、出土地自体の特質にも迫ることができるのではないだろうか。<sup>(4)</sup>

---

(1) 後漢時代の鎮墓文に関する理解は、江優子の成果【江2003】に負っている。なお具体例については、渡部武【渡部(編)1999】や劉昭瑞【劉2001】などを参照されたい。

(2) 中国では、姜伯勤が道教に関わらせて言及しているほか【姜1996:270-280】、近年、張勳燎と白彬が、やはり道教研究の一環として、敦煌をはじめとする西北地域で出土した鎮墓文をほぼ網羅的に紹介している【張・白2006:363-544】。

(3) かかる観点から私も紀年に注目し、そこに用いられている元号を手がかりにしながら、「五胡」時代の国際関係について検討の機会をもった【關尾1985】。また陳國燦は、被葬者の本貫記載を手がかりとしながら、敦煌における郷里制について検討している【陳1989:40(陳2002:363-364)】。

(4) この点については、既にも大まかな見通しを示したことがある【關尾2004】。またそのための基礎作業として、西北地域から出土した鎮墓文に関する情報も整理した【關尾(編)2005】。

本稿ではそのような課題に向けた基礎作業の一環として、敦煌出土の鎮墓文について初歩的な検討を行うものだが、最初に、鎮墓文が出土した墓葬を含む古墓群とそれに対する発掘調査の経過を整理し、墓葬の状況についても簡単に見ておきたい。発掘調査の経過を整理するのは、敦煌一帯では頻繁に発掘調査が行われてきたにもかかわらず、その詳細についてはまとまった記述がほとんどないからであり、墓葬の状況を問題にするのは、そこから鎮墓文を作成された死者すなわち被葬者の社会的な地位をうかがいしることができる<sup>(5)</sup>と考えるからである。

## 1. 発掘調査の経過

敦煌市街の東郊、新店台古墓群（DXM）と佛爺廟湾古墓群（DFM）は、あわせると東西20キロ・南北5キロに及ぶ広大な規模をほこり、万単位に上る漢唐間の墓葬が点在しているとされる。両古墓群の発掘調査の歴史は、日中戦争中の1944年までさかのぼることができるが、1970年代になると、両古墓群とは市街をはさんで反対側、すなわち西郊の祁家湾古墓群（DQM）に対しても発掘調査が行われるようになった。この古墓群も総面積が100平方キロに及ぶ広大なもので、やはり漢から唐に至る万単位の墓葬からなっているという。

すなわち敦煌では、市街をはさんで東西2つの大型墓地が同時に造営されていたわけだが、鎮墓文はこの両古墓群から等しく出土している。そこでここでは、新店台・佛爺廟湾の両古墓群（以下、「東郊墓」と略記）と、祁家湾古墓

---

(5) なお本稿は、井上徳子氏（元京都大学研修員）と共著の論文「敦煌西晋・十六国墓初探」の成果を一部取り入れてある。この論文は、1995年9月に楊富学氏（敦煌研究院）から『段文傑敦煌研究五十年紀念文集』（北京：世界図書出版公司、1996年）への寄稿を請われた關尾が、井上氏との討論の結果をふまえてまとめたものである。1996年5月に書き上げて、当時大阪市立大学大学院に在籍中だった陳力氏（現阪南大学国際コミュニケーション学部）に漢訳していただき、楊氏のもとに送り届けた。しかしすでに締切を過ぎていたということで、楊氏からは、予定を変更して『北京図書館館刊』（当時）に掲載する旨の返信をいただいた。けれどもその後、楊氏からはなんの連絡もなく、人を介して楊氏に問い合わせたが、要領を得るような返答は残念ながら返って来なかった。そのようなしだいなので、あるいは中国国内の学術雑誌上ですでに公表されているのかもしれないが、原著者である私たちは把握できていない。

群（以下、「西郊墓」）とに対する発掘調査の経過について、それぞれ簡単に整理しておく。

### 1) 東郊墓

東郊墓に対する発掘調査は、①歴史語言研究所西北科学考察団歴史考古組（1944年）、②甘肅省博物館・敦煌文物研究所（1960年）、③同じく甘肅省博物館・敦煌文物研究所（1970年）、④敦煌県博物館（1980年）、⑤同じく敦煌県博物館（1982年）、⑥甘肅省文物考古研究所（推定）（1984年）、⑦同じく甘肅省文物考古研究所（1987年）、⑧同じく甘肅省文物考古研究所（1995年）、そして⑨同じく甘肅省文物考古研究所（2000年）の9回にのぼっている。

日中戦争中に行われた①では、佛爺廟湾（当時は FYM）の28座と市街東8キロにある老爺廟（LYM）の2座、計30座が調査対象となったが、このうち西晋・「五胡」墓は21座であり、そのうち鎮墓文は6座から7点（推定）が出土した。敦煌から初めて鎮墓文が出土したわけだが、破碎された陶片が多く、紀年を確定できるものはない。この①の報告にあたるのが、閻文儒【閻1950】と夏鼐【夏1955(夏2002)】であるが、両者とも精密な地図が附されておらず、発掘地点を特定することはできない。

②は、市街東約15キロの新店台で行われたもので、対象となったのは2座(60DXM 1、2)だけだが、うち一方の60DXM 1から3点の鎮墓文が出土した。おおまかな位置は、敦煌と安西とを結ぶ安敦公路の南側、莫高窟に通じる文化公路の東側になる。【敦研1974】がその簡単な報告である。

②と同じ機関によって行われた③では、義園湾の5座が対象となった。義園湾は市街の東南5.5キロに位置しており、発掘地点は安敦公路の南側、文化公

---

(6) 【李(主編)1994:628】によれば、1981年3月に、敦煌空港の建設にともなって発掘調査が行われ（新店台であろう）、10点余の鎮墓文が出土したという。建興や和平といった紀年が確認できるというが、この年の調査については、ほかに記すところがない。さらに和平という紀年の鎮墓文の出土例は初めてである。また【敦博(編)2002】には、1991年12月、1999年5月、さらには2001年5月に佛爺廟湾古墓群（「佛爺廟墓群」に作る）から出土したとされる画像磚の写真が多数収録されている（その一部は、新店台古墓群出土の可能性もある）。したがって『中国考古学年鑒』などには収録されていない、敦煌市博物館による比較的小規模な発掘調査も継続的に行われている可能性があるが、この点については未確認である。

路の西側にあつて、佛爺廟灣の東北方にあたるが、【敦研1974】によると、鎮墓文は1点も出土しなかつたようである。

④は、敦煌県博物館(当時)によるもので、市街東南9キロの佛爺廟灣付近、鳴沙山北麓の3座(80DFM 1-3)が対象だった。簡単な報告である【敦博1983】によると、この時の発掘地点はまさに東郊墓の最南端に位置している。3座のうち2座から計10点の鎮墓文が出土している。【敦博(編)2002】には、そのうち一部の写真がある。

⑤も敦煌県博物館によって行われたもので、市街の東20キロの新店台で46座(82DXM 2-67の一部)が発掘され、出土遺物の整理については、北京大学考古系(当時)に委ねられた。【敦博・北大1987】がその報告だが、これによれば、16座から32点の鎮墓文が出土しているというが、文字が多少とも釈読できるのは13点程度<sup>(7)</sup>のようである。【敦博(編)2002】には、そのうち一部の写真がある。

⑥については、⑦に関する第1報である何双全【何1989】によって知りうるのみである。これによれば、⑥は3回目の「正式発掘」(1回目は②、2回目は③で、敦煌県博物館による④と⑤は算入されていない)で、80余りの墓葬が発掘されたという。しかしこれらの位置や時代などはいさゝ不明である。

⑦についても、【何1989】以外にはほとんど情報がない。これによると、市街東15キロ、莫高窟の北15キロの地点なので、新店台に相当しよう。敦煌の空港の建設工事にとまなう調査で、西晋から唐に至る116座の発掘が行われたもようである。鎮墓文も22点ほど出土しており、その紀年は西晋の元康7(279)年から前涼の建興19(330)年に及ぶという。しかし、このうち3点だけが、陳國燦<sup>(8)</sup>【陳1989(陳2002)】に抄録されているにすぎない。なお画像磚墓については、【甘研(編)1998】に報告があり、空港の敷地内に位置しているが、これによると、新店台ながら87DFM133という番号が附されている(正しくは、87

---

(7) 82DXM 4ならびに82DXM65から出土した2点であるが【敦博(編)2002:46、92】、前者については出土地を「機場墓群」とするものの、後者については「佛爺廟墓群」という説明がついている。【敦研1974:191図1】によれば、新店台古墓群の地にはその後空港が敷設されたので、古墓群の名称が「機場(古)墓群」に変更されたのはわかるが、それとは別の理由で、「佛爺廟(灣古)墓群」が東郊墓全体の総称になったようである。

(8) 【王・李1997】には、陳國燦から提供された積文の全文が掲げられている。

DXM133とすべきであろう)。この墓は、現在佛爺廟湾に移築されている西晋墓に該当する可能性が高い。

⑧の概要も、⑨に関する第2報ともいべき李永寧【李2003】によって初めて知りえたもので、600余に上る多数の墓葬が発掘されたようである。【甘研(編)1998】によると、やはり空港の敷地内に位置しており、うち5座(95DFM 37、39、91、118、167)が画像磚墓であったが、⑦の87DFM133も含めてこれら6座の画像磚墓からは、鎮墓文は出土しなかったようである。

⑨は、空港の拡張工事にともなう調査で、西晋から唐に至る324座(西晋259、北凉2、唐63)の墓葬が発掘された。第1報である【李2002】によると、魏晋時代の紀年を有する鎮墓文が出土したようで、第2報【李2003】によると、点数は40余りで、その大部分は紀年が積読できるとのことである。これまで、出土した鎮墓文の初出は西晋時代だったので、魏の鎮墓文が出土したことは画期的だが、詳細は不明である。

以上、東郊墓に対する発掘調査は計9回を数え、うち鎮墓文が出土したことが確実な調査は①、②、④、⑤、⑦、および⑨の6回に上るが、出土鎮墓文の積文がすべて公表されたのは、①、②、④、および⑤の4回分にすぎない。これに一部のみ公表されている⑦出土のものを合わせても、積読されたものは計31点であり、このうち「五胡」時代の紀年を有するものが23点を占める。

## 2) 西郊墓

西郊墓に対する発掘調査は、東郊墓に対するそれと比べると少なく、⑩敦煌県博物館(1975~76年)、⑪甘肅省文物工作隊(1985年)の2回である。<sup>(9)</sup>

⑩で発掘されたのは3座(DQM 1-3)だけで、その概要は⑤と合わせて【敦博・北大1987】にあるが、発掘地点の詳細は不明であり、鎮墓文の出土例も報告されていない。

いっぽうそれに対して⑪は、本格的かつ悉皆的ともいべき調査で<sup>(10)</sup>、計117座(85DQM201-236、301-381)が発掘された。【甘研(編)1994】はその報告書

(9) 【李(主編)1994】によれば、早く1970年に墓群の東北の角で、2座の晋代の墓葬が発見されたというが、詳細は不明である。

(10) 【張1988】は、⑪に関する第1報であるが、【甘研(編)1994】と一部異同がある。

で、それによれば、このうち41座の墓葬から計89点の鎮墓文が出土した。<sup>(11)</sup>

以上、西郊墓からは計89点の鎮墓文が出土しており、そのうち「五胡」時代の紀年を有するものは東郊墓と比べると割合は小さく、26点である。

### 3) その他

東郊墓と西郊墓以外にも、じつは三危山付近で鎮墓文が1点だけだが、出土している。段文傑によってその釈文の一部が紹介されているもので【段1985】、三危山下の墓葬から出土したということだが、段自身も未発表と注記しているとおおり、管見の範囲では、発掘報告などはない。<sup>(12)</sup>ただ紀年は明らかに「五胡」時代に属するので、本稿でも検討の対象とする。

## 2. 古墓群と被葬者

敦煌では、東郊墓と西郊墓という2つの古墓群が、西晋・「五胡」時代、同時に造営されていたことは、出土した鎮墓文の紀年から疑いのないところである。それでは、なぜ2つの大型古墓群が同時に造営されたのだろうか。両古墓群に埋葬された被葬者にどのような違いがあるのだろうか。ここではこのような問題も念頭におきながら、両古墓群の被葬者の地域性と階層性について考えてみたい。

### 1) 古墓群の被葬者—地域性について

最初に被葬者の地域性について考えたいが、この問題の手がかりは、やはり

---

(11) ①の調査の結果、画像磚が85DQM301、310、369の3座から各1点ずつ出土したが【甘研(編)1994:139-140】、これらの墓葬からはいずれも鎮墓文が出土している【同:198-199附表6】。ただ画像磚の出土点数から判断して、これらの墓葬を画像磚墓と表現するのは妥当ではないだろう。

(12) 段文傑が、あえてこの鎮墓文に言及したのは、これ(だけ)に、「死者佛女」とあって、仏教信仰の影響が認められるからである【段1985:13】が、その後、西郊墓である祁家湾からも、「佛生」徳文「佛徳」と記された鎮墓文(85DQM310:23)が出土した【甘研(編)1994:86-87】。これら、仏教信仰の影響が認められるような鎮墓文は、敦煌独特のもので、この点にも敦煌の特質が認められるが、本書では指摘するにとどめたい。

鎮墓文にある。後述するように、通常、鎮墓文には冒頭に、被葬者の死亡年月日と姓名が記されているが、そのなかに被葬者の本貫が郷や里のレベルまで詳細に記されているものがある。いまこの部分だけを東郊墓・西郊墓ごとに年代順<sup>(13)</sup>に列挙すると、以下のようになる。

#### 【東郊墓】

- ① 「前涼建興十三（三二五）年五月閻芝鎮墓文」（87DXM135: 1、2〈録〉  
【王・李1997:79】・【關尾(編)2005:34】<sup>(14)</sup>  
效穀東郷□□里民大女閻芝
- ② 「前涼建興十七（三二九）年四月郭綦香鎮墓文」（87DXM187:10〈録〉【王・李1997:79】・【關尾(編)2005:35】  
大女西郷郭綦香
- ③ 「前涼建興十七（三二九）年八月某人鎮墓文」（82DXM67出土〈録〉【敦博・北大1987:630】・【關尾(編)2005:36】  
敦煌效穀東郷□山里（後缺）
- ④ 「前涼建興十九（三三一）年七月李興初鎮墓文」（87DXM176: 1〈録〉【王・李1997:83】・【關尾(編)2005:38】  
敦煌郡效穀縣東郷延壽里大男李興初
- ⑤ 「西涼庚子六（四〇五）年正月張輔鎮墓文(一)」（80DFM 1 : 32〈模・録〉  
【敦博1983:57】・【關尾(編)2005:72】  
敦煌郡敦煌縣東郷昌利里張輔

#### 【西郊墓】

- ⑥ 「北涼神璽二（三九八）年八月某富昌鎮墓文(一)」（85DQM310:15〈模〉  
【甘研(編)1994:115図78-3】〈録〉【同前: 116】・【關尾(編)2005:69】  
敦煌郡西郷<sup>ママ</sup>里民□富昌
- ⑦ 「西涼建初五（四〇九）年閏（十）月畫虜奴鎮墓文(二)」（85DQM336: 5〈模〉【甘研(編)1994:118図79-2】〈録〉【同前:117】・【關尾(編)2005:76】  
敦煌郡敦煌縣都郷里民画虜奴

---

(13) 一人の被葬者に対して複数の鎮墓文が埋納されていた場合は、釈読しやすいものを選んで掲げた。

(14) 【關尾(編)2005】では、①の紀年の西暦比定を誤ったので、本文のように訂正しておく。

⑧ 「西涼建初十一（四一五）年十二月魏平友鎮墓文（一）」（85DQM369：9  
〈模〉【甘研（編）1994：119図80】〈録〉【同前：122】・【關尾（編）2005：77】）  
敦煌郡敦煌縣西鄉里魏平友

⑨ 「北涼玄始九（四二〇）年九月某安富鎮墓文（一）」（85DQM312：5〈模〉  
【甘研（編）1994：118図79-3】〈録〉【同前：119】・【關尾（編）2005：80】）  
敦煌郡敦煌縣都鄉里民□安富

①・③・④にある效穀（県）は、前漢以来、西晋に至るまで敦煌郡の属県としてその名が歴代の地理志に見えており、④からも明らかのように、「五胡」時代においても引き続き属県だったと考えられる。これら3点が出土した新店台一帯が、效穀県、とくにその東郷に本貫を有する人士の墓域だったことはまちがいないだろう。問題が残るとすれば、效穀（県）城の位置について、『讀史方輿紀要』でも「在（沙州）衛東北」（同卷64陝西13）とするだけで、詳細が明らかではないことである。唯一の手がかりは、敦煌出土の「沙州圖經」（B.N.P.2005〈写〉【上古・法図（編）1995：56】〈録〉【池田1975：73】・【唐・陸（編）1986：15】）の「古効穀城、周廻五百歩、右在（沙）州東北卅里、是漢時効穀縣、本是漁澤鄣」という記述である。李并成はこれを参考にしつつ、現地調査の結果から、敦煌市の郭家堡郷墩湾村の北に残っている墩墩湾古城をかつての效穀県城に比定した【李1995：125】。現在の敦煌市街の東北17kmに位置しており、新店台の北方にあたる。その是非は別途検討することにして、新店台が效穀県の墓域だったという理解に立てば、②の「西郷」も、敦煌県ではなく、效穀県のそれと考えて大過あるまい。

しかし東郊墓全体が效穀県を本貫とする人士の墓地であったと考えることは困難である。なぜなら東郊墓のなかでも西端の佛爺廟湾から出土した⑤は、敦煌県の東郷を本貫とする人士のものだからである。すなわち、東郊墓の東側（新店台）は效穀県の人士の、西側（佛爺廟湾）は敦煌県東郷の人士の、それぞれ墓域であったと考えられるのである。

一方それに対して西郊墓は、⑥以下の4点から判断する限り、敦煌県の都郷

---

(15) 【譚（主編）1982A】・【譚（主編）1982B】など、最近の歴史地図もそれは同じで、敦煌県の東北方に「效穀」の2字を書き入れているだけである。

(16) 【李（主編）1994：68】の「郭家堡郷区画図」によると、墩湾村は敦煌空港のほぼ真北18kmほどに位置しており、やや距離がありすぎるように思われる。

と西郷の人士のための墓域であったことが疑いない。<sup>(17)</sup>

以上、鎮墓文の記載から、東郊墓のうち東側の新店台古墓群は敦煌郡敦煌県の、同じく西側の佛爺廟湾古墓群は敦煌郡敦煌県東郷の、そして西郊墓の祁家湾古墓群は敦煌郡敦煌県の都郷と西郷の、それぞれ墓域であったと判断されるのである。それでは、つぎに墓葬に見えている階層性の問題について考えてみよう。

## 2) 古墓群の被葬者—階層性について

上に見た被葬者の本貫が記載された9点の鎮墓文のうち、①、⑥、⑦、および⑨の4点までが被葬者の身分について、「民」と明記してあった。また①と②には「大女」、④には「大男」ともあった。このことは彼らが一般民戸であったことを示しており、両古墓群とも、かかる一般民戸の墓葬を含んでいたことがわかる。またそれと同時に、鎮墓文が特定の階層だけに受容されたのではなく、広く普及したことをうかがわせる。ここではこの問題について、別の角度から検討しておきたい。

1960年に新店台1号墓から汎心容にまつわる鎮墓文が3点出土した。下に掲げるのがそれである。

- ⑩ 「前涼升平十三（三六九）年潤（正）月汎心容鎮墓文（一）」（60DXM1：26 陶罐〈写〉【敦研1974：図版7-1】〈模〉【同前：196図13-1】〈録〉【同前：198】・【關尾（編）2005：56】）

升平十三年

潤（正）月甲子

朔廿一（日）壬寅、

張弘妻

汎心容

五穀瓶。

- ⑪ 「前涼升平十三（三六九）年閏（正）月汎心容鎮墓文（二）」（60DXM1：27 陶罐〈写〉【敦研1974：図版7-1】〈模〉【同前：196図13-2】〈録〉【同

---

(17) ただし西郊墓出土の4点はいずれもなぜか里名が明記されていない。この点については、後考に俟ちたい。

前:198】・【關尾(編)2005:57】)

升平十三年

閏(正)月甲子

朔廿一日壬

寅、張弘

妻汎心

容五瓶<sup>レ</sup>穀。

- ⑫「前涼升平十三(三六九)年閏(正)月汎心容鎮墓文(三)」(60DXM1:4 陶鉢〈模〉【敦研:196図13-3】〈録〉【同前:197】・【關尾(編)2005:58】)

天注

地注

[中缺]

汎注

玄注

鴉注

風注

火注

人注

この3点の鎮墓文が出土した墓葬は、東西(長さ)3.6メートル、南北(広さ)3.1メートル、高さ2.4メートルの合葬用の単室墓だが、<sup>(18)</sup>20メートル余に及ぶ墓道を有しており、しかもほかの4座の墓葬とともに、塋域のなかに位置していた。<sup>(19)</sup>塋域は族的な結合の強さを象徴していると考えられるし、後述する西郊墓では一部の甲型墓と乙型墓以外はいずれも20メートル未満の墓道しか認められないので、<sup>(20)</sup>20メートル余という墓道の長さは、被葬者一族の社会

---

(18) 【敦研1974:193図7】によれば、墓室の入口の左右に小さな龕が附設されているようにも見えるが、確証がないので、以下では単室墓として扱う。

(19) ただし、本墓葬も含め5座の墓道が全て西から東に向いているのに対し、塋域の入口は南から北に向いている。また塋域は一辺が約110メートルの正方形である【敦研1974:191図2】。

(20) 甲型の具体例としてあげられている祁家湾321号墓(85DQM321)が32メートルの墓道を有しているが【甘研(編)1994:21】、これを除くと25メートルの同223号墓(85DQM223、甲型)、22メートルの同318号墓(85DQM318、乙型)がある程度にすぎない。

的・経済的な力量を示唆していると言えよう。その被葬者である汜心容だが、<sup>(21)</sup>汜氏は敦煌の名族として知られている。ただ彼女自身は張弘なる男性の妻として埋葬されており、本塋域は張氏一族のものと考えられよう。幸いなことにこの張弘と同一とおぼしき人物について、『晋書』巻86張軌伝附張重華伝に、

是時、石季龍西中郎將王擢結隴上、爲苻雄所破、奔(張)重華。重華厚寵之、以爲征虜將軍・秦州刺史、假節、使張弘・宗悠率步騎萬五千配擢、伐苻健。健遣苻碩禦之、戰于龍黎。擢等大敗、單騎而還、弘・悠皆没。<sup>(22)</sup>

とある。『資治通鑑』は龍黎での衝突を巻99永和9(353)年2月条に繋いでおり、汜心容の死に先んじること16年である。軍將として前涼政權に出仕していたこの張弘が汜心容の夫であるならば、彼女が合葬墓に単身で埋葬されていた理由も了解されよう。そしてまた、鎮墓文が埋納された墓葬・古墓群の被葬者の階層性という問題にも、手がかりが与えられよう。

先に見たごとく、東郊墓のうち新店台は敦煌郡效穀県に本貫をつなぐ人士の墓域と考えられるので、張弘は敦煌效穀の人だったということになるが、汜氏同様、敦煌の張氏もこの地の名族として知られており、「五胡」時代には、金城太守張冲、同張質(以上、前涼)、酒泉太守張顯(西涼)、および兵部尚書張湛(北涼)などを輩出させている。汜心容の頭部付近から出土した精巧な金飾(〈写)【敦研1974:図版7-3】)や装飾品の一部と思われる孔のあいた雲母片なども、長い墓道や塋域と相俟って張氏一族の社会的・経済的な力量の一端をうかがわせる資料と言えよう。<sup>(25)</sup>

---

(21) 『元和姓纂』巻9にも簡単な記述があるが、B.L.S.1889の分析に依拠した池田温の成果【池田1962】を参照されたい。

(22) 同伝にはこれより以前、「俄而麻秋進攻枹罕。……寧戎校尉張璩從之、固守大城。……璩使宋修・張弘・辛挹・郭普距之、短兵接戰、斬二百餘人、賊乃退」ともある。この後趙との攻防戦は347年4月のことなので(『資治通鑑』巻97永和3年4月条)、350年前後の時期、張弘は、前涼の対東方戦線の一翼にあったのだろうか。

(23) ただし、宗悠を註(22)の記事にも見えている宋修に作り、張弘ともども將軍で前秦に捕らえられたことを記す。

(24) 張澍『續敦煌實録』【李(校点)1985】は、巻1に張姓の人士を集録しているが、敦煌が本貫であることが明白なものばかりではない。そのなかで敦煌が本貫であることが確実な人士だけを本文に掲げた。ただ彼らが敦煌の效穀県を本貫とするか否かはわからない。

ところで、悉皆的な調査が行われた西郊墓の祁家湾古墓群でも、塋域を有する墓群の存在が確認されている。そこで、あらためて【甘研(編)1994】によりながら、西郊墓の墓葬について考えてみよう。<sup>(26)</sup>

西郊墓は、出土鎮墓文の紀年や埋納された器物の型式などから、造営が西晋初期の270年代から「五胡」時代の420年代に及んだことが確認されている。この間に築造された墓葬の型式は、以下のように分類されている。

甲型：墓室が前室と後室の2室からなるもの（8座）

乙型：墓室は単室だが、耳室または龕が附属するもの（35座）

丙型：墓室は単室で、耳室や龕が附属しないもの（36座）

丁型：墓室が単室で、刀形を呈するもの（14座）

また塋域については、次の6例の存在が確認できるが（「85DQM」は省略）、多くは3座によって構成されている【甘研(編)1994: 5-7 図3】。

㉞ 頓氏：207（乙）、208（甲）、209（乙）。

㉟ 不詳：215（丙）、216（乙）、217（乙）。

㊱ 呂氏：317（乙）、318（乙）、319（乙）、320（乙）、321（甲）。

㊲ 不詳：355（乙）、356（乙）、357（乙）。

---

(25) 【敦研1974:192】によれば、本墓葬は盗掘の被害を受けているようだが（雲母片は部分的に残存しているようだが、それも盗掘の結果かもしれない）、にもかかわらず金飾が出土したわけで、本来数多くの金器が埋納されていた可能性も考えられる。なお墓道に関しては、画像磚墓として新店台から佛爺廟湾に移築されている133号墓（87DFM133、双室墓）の24.6メートルに匹敵する規模を誇っている。同墓については、【甘研(編)1998】を参照。

(26) 西郊墓は東西が約5キロで面積は約100平方キロというので、南北に細長い様相を呈していることになる【甘研(編)1994: 2 図1】。その東端の西支渠以西・党河故道以東には漢代墓があり、党河故道以西には発掘調査が行われた西晋・「五胡」時代墓が立地し、さらにその西側や北側に広がる広大な範囲には北魏から隋・唐にかけての墓葬が分布している。ようするに西郊墓の墓域は漢代、先ず県城に接近した場所に設定され、時代が下るにつれてしだいに県城から遠距離に拡張していったということになる。前節㉟の調査は、党河故道以西の地区のほぼ南端部分を対象とした、東西300メートル、南北200～300メートルに及ぶものなので、悉皆的な調査とは言っても、その対象面積は1平方キロにも満たない、西郊墓全体から見ればきわめてささやかな成果にすぎない。また党河故道以西の地区の北半分についてもふれるところがないので、西晋・「五胡」時代墓に限定しても、そのごく一部を対象とするにとどまったものと考えられる。したがって、西郊墓のデータにしても大きな制約があることは認めざるをえない。

㊦ 不詳：361（丙）、362（甲）、363（乙）。

㊧ 魏氏：371（丁）、372（丙）、373（丙）。

6例のなかには、小規模な墓葬である丙型と丁型だけしか含まない㊦のような埜域もあるが、過半は甲型と乙型の墓葬から構成されている。このことは、頓氏<sup>(27)</sup>（㊦）や呂氏（㊧）の卓越した力量の反映であろう。

ところで先の新店台1号墓をあえて祁家湾古墓群の類型に当てはめてみると、丙型に該当するが、じつは丙型はさらに4類型に細分されている。

丙A型：墓室はほぼ正方形で、長さは2.1～2.6メートル、広さは1.7～2.4メートル。墓道は15メートルで、墓室の高さは1.98メートル（85DQM310）。合葬墓。

丙B型：墓室は長方形で、長さは2～2.9メートル、広さは1.3～2.22メートル。墓道は7.6メートルで、墓室の高さは1.16メートル（85DQM218）。単葬墓。

丙C型：墓室は梯形、弧方形、円角方形など多様で、長さは3.1メートル、前方の広さが2.4メートルで後方の広さが2.8メートル、高さは1.98メートル（85DQM332）。合葬墓。

丙D型：墓室は長条形で、長さは2.6～3.5メートル、広さは0.86～1.9メートル。墓道の長さは8メートルで、墓室の高さは1.14メートル。単葬墓。

新店台1号墓は形状からして丙A型に属するが、墓室にせよ墓道にせよ規模はそれを上回っており、丙A型以上となる。ようするに新店台古墓群の墓葬に祁家湾古墓群の類型を厳密に適用することはできないということがわかる。加えて、墓葬の形状や規模が直ちに被葬者の社会的・経済的な力量に比例するわけではないだろうし、270年代から420年代に及ぶ約1世紀半の間、西郊墓では墓葬自体の簡素化・小型化が進行していたことも疑いない。しかし同時期にあっては、甲型から丁型へと墓葬の規模は縮小し、埋納された随葬品も貧弱になることは首肯されよう。したがってあえて比較しようとするれば、甲型や乙型の墓葬の被葬者は、新店台1号墓の被葬者と同等かそれ以上の社会的・経

---

(27) ただし、張瀾『續敦煌實録』【李（校点）1985】には、頓氏と呂氏いずれの出身も収録されていない。

済的な力量を有する階層であり、丙型や丁型の墓葬の被葬者は、同等かそれ以下の力量を有する階層というふうなおおよその目安を立てることは許されよう。

じじつ甘研は、上のような墓葬の型式から、甲型を「豪族地主」、乙型を「一般中、小地主」、丙型以下を「経済状況が良くない平民・貧民」のものとしている【甘研(編)1994:171】<sup>(28)</sup>。先に「民」と被葬者の身分が示されていた⑥、⑦、および⑨の3点の出土した墓葬について、その類型を調べると、以下のようになる(「85DQMは省略」)。

⑥：310—丙A型

⑦：336—乙C型

⑨：312—乙C型

⑦と⑨の乙C型とは、乙型のなかでも、龕が小さくなり、限りなく丙型に近づいたタイプである。したがって上記の区分と大きくは齟齬を来さないと言えよう。たしかに「貧民」が小規模ながら墓葬を築きえたのかはきわめて疑わしいが、長さ2.1メートル、広さ0.7メートル、高さ1メートルという狭小な墓室と、3点の陶器と1点の木梳という貧弱な随葬品からなる85DQM202【甘研(編)1994:51図38】のような丁型墓は、一般民戸(平民)の墓葬とするにふさわしい存在ではある。

さてこのような墓葬の型式ごとに、鎮墓文の出土墓葬を掲げると以下のようになる(カッコ内は総数)<sup>(29)</sup>。

---

(28) このような推定には、張弘の妻である汎心容でさえ単室墓に埋葬されたという事実も与っているようである。したがって「豪族地主」という範疇は、汎氏や張氏を凌ぐほどの力量を有する一族にこそふさわしいということになるが、実際にはそのような存在は想定できない。また新店台1号墓のように、金器が出土した墓葬は西郊墓にはなく、装飾用の銀器が出土した墓葬が6座あるにすぎない【甘研(編)1994:137-138】。

(29) 【甘研(編)1994:183-199】によりながら、それぞれの墓葬番号を掲げておく(「85DQM」は省略)。

甲型：208、306、321、362。

乙型：207、209、210、301、302、307、312、318、319、320、323、330、336、348、349、351、356、364、369。

丙型：201、213、218、310、313、314、328、329、331、332、333、340、370。

丁型：206、350、358、365、371。

甲型：4座（8座）

乙型：19座（35座）

丙型：13座（36座）

丁型：5座（14座）

甲型では全墓葬の半数で、また乙型では半数以上の墓葬で鎮墓文が出土していることがわかる。それに比べると、丙型や丁型の墓葬では出土率こそ下がるものの、それでも3分の1以上の墓葬から鎮墓文が出土していることがわかる。先述したように、丁型墓であれば一般民戸でも築きえたとするならば、彼らが鎮墓文を作成・埋納した可能性も十分に考えられよう。とするならば、鎮墓文は敦煌においては、少なくとも「五胡」時代、諸政権に参画した地域社会の名族層といった特定の社会階層に限定されて用いられた葬納用文物ではなく、一般民戸をも含めたより広汎な社会階層に葬納用文物として用いられていたと言うことができよう。

それでは、鎮墓文とはどのような様式・内容を有しており、またどのように用いられたのであろうか。これが次の課題となる。

（待続）

## 引用文献一覧

〔日文・五十音順〕

池田 温

1962 「敦煌汜氏家伝残巻について」、『東方学』第24輯：14-29。

1975 「沙州図経略考」、榎博士還暦記念東洋史論叢編纂委員会（編）『榎博士還暦記念東洋史論叢』：31-101、東京：山川出版社。

江 優子

2003 「漢墓出土の鎮墓瓶について—銘文と墓内配置に見える死生観—」、『鷹陵史学』第29号：1-45。

關尾史郎

1985 「前涼「升平」始終—『吐魯番出土文書』割記(2)—」、『集刊東洋学』第53号：106-120。

2004 「魏晋“五胡”時代の鎮墓文からみた敦煌の地域的特質」、『敦煌学国際聯絡委員会通訊』2004年第2期：76-77。

2005 （編）『中国西北地域出土鎮墓文集成（稿）』、新潟：新潟大学超域研究機構「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」プロジェクト・大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅶ。

町田隆吉

- 1986 「敦煌出土四・五世紀陶罐等銘文について—中国古代における葬送習俗に関する覚え書き—」、『研究紀要』（東京学芸大学附属高等学校大泉校舎）第10集：101-118。

渡部 武

- 1999 （編）『鎮墓文・衣物疏集成（初篇）』（1998年度学部研究教育補助金研究報告書「鎮墓文・墓券に現われた古代中国人の死生観」資料篇）、平塚：東海大学文学部東洋史研究室。

[中文・画数順]

上海古籍出版社・法国国家図書館（上古・法図）

- 1995 （編）『法藏敦煌西域文献』第1冊、上海古籍出版社。

王 素・李 方

- 1997 『魏晋南北朝敦煌文献編年』、台北：新文豐出版公司・補資治通鑑史料長編稿系列。

甘肅省文物考古研究所（甘研）

- 1994 （編）『敦煌祁家灣—西晋十六国墓葬發掘報告』、北京：文物出版社。  
1998 （編）『敦煌佛爺廟灣西晋画像磚墓』、北京：文物出版社。

何双全

- 1989 「敦煌新店台、佛爺廟灣晋至唐墓群」、中国考古学会（編）『中国考古学年鑒 1988』：247-248、北京：文物出版社。

李永寧

- 2002 「敦煌佛爺廟灣晋、唐墓葬」、中国考古学会（編）『中国考古学年鑒 2001』：310-311、北京：文物出版社。  
2003 「敦煌佛爺廟灣魏晋至唐代墓群」、中国考古学会（編）『中国考古学年鑒 2002』：391-392、北京：文物出版社。

李并成

- 1995 『河西走廊歷史地理』、蘭州：甘肅人民出版社。

李濟民

- 1994 （主編）『敦煌市志』、北京：新華出版社・中華人民共和國地方志叢書。

李鼎文

- 1985 （校点）『續敦煌實錄』、蘭州：甘肅人民出版社・《隴右文献》叢書。

姜伯勤

- 1996 『敦煌藝術宗教与礼樂文明—敦煌心史散論』、北京：中国社会科学出版社・唐研究基金会叢書。

段文傑

- 1985 「道教題材是如何進入佛教石窟的一莫高窟249窟窟頂壁画內容探討」、敦煌文物研究所（編）『1983年全国敦煌學術討論會文集』石窟・藝術編上：1-16、蘭州：甘肅人民出版社。

夏 鼎

1955 「敦煌考古漫記」(一)、『攷古通訊』創刊号：2-8、図版1-2。

2002 『敦煌考古漫記』、北京：百花文芸出版社。

唐耕耦·陸宏基

1986 (編)『敦煌社会經濟文献真蹟积録』第1輯、北京：書目文献出版社／香港：古佚小説会。

張勳燎·白 彬

2006 『中国道教考古』全6冊、北京：線装書局。

張 瓏

1988 「敦煌祁家湾漢至唐代墓群」、中国考古学会(編)『中国考古学年鑒1986』：232-233、北京：文物出版社。

陳國燦

1989 「唐五代敦煌里鄉里制的演變」、『敦煌研究』1989年第3期：39-50、110。

2002 『敦煌学史事新証』、蘭州：甘肅教育出版社·敦煌学研究叢書。

敦煌文物研究所考古組(敦研)

1974 「敦煌晋墓」、『考古』1974年第3期、191-199、図版7。

敦煌市博物館(敦博)

2002 (編)『敦煌文物』、蘭州：甘肅人民美術出版社。

敦煌県博物館(敦博)

1983 「敦煌佛爺廟湾五胡時期墓葬發掘簡報」、『文物』1983年第10期：51-60。

敦煌県博物館考古組·北京大学考古實習隊(敦博·北大)

1987 「記敦煌發現的西晋、十六国墓葬」、北京大学中国中古史研究中心(編)『敦煌吐魯番文献研究論集』第4輯：623-648、北京：北京大学出版社。

閻文儒

1950 「河西考古簡報」(上)、『国学季刊』第7卷第1号：115-139。

劉昭瑞

2001 『漢魏石刻文字繫年』、台北：新文豐出版公司·補資治通鑑史料長編稿系系列。

譚其驤

1982 A (主編)『中国歴史地図集』第2冊(秦·西漢·東漢時期)、北京：地圖出版社。

1982 B (主編)『中国歴史地図集』第3冊(三国·西晋時期)、北京：地圖出版社。

(2006年12月16日稿了)